

岐阜分室開設 1 周年を迎えて

岐阜分室 研究第 3 部次長 梅谷内 信夫

(財) リバーフロント整備センター岐阜分室が昨年(2014)の 7 月に開設し、まもなく 1 周年を迎えようとしております。

24 号にも記述させていただきましたが、岐阜の地は日本列島の中央部に位置し、木曽三川を中心として中部地区には自然豊かな環境を有した河川があり、かつ既往調査の実績も多いことからこの地に分室を設け現地にて具体的な現象や追跡調査を着実に進めることによって、人と自然にやさしい川づくりに貢献することを目的に設立しました。

小さな世帯ゆえ地域の皆様の御期待に応えるほどのことはできませんでしたが、我々なりに勉強してきたものとして大きく分けますと、研究会等の開催、多自然型川づくり、および魚にやさしい川づくりの 3 点に要約できます。

研究会の開催

研究会は 2 件開催させていただきましたが、その内の 1 つが岐阜県内の国及び県の職員で係長を中心として現場を中心とした研究会を開いております。

この研究会を通じて土木系の技術者が生態系の先生から御指導を受けるだけでなく、土木技術者から見た素朴な疑問を意見交換することによって、治水と環境の接点をお互いに理解を高めることができるようにしていきたいものと考えて実施しております。

もう一方の研究会は東海地区の学識者、行政、業界からは設計に携さわる建設コンサルタント、多自然型川づくりを研究し、新たなブロックの開発に努力をされているコンクリートブロック製造業者の方々が参加して名古屋において自然共生河川にかかわる研究会を進めております。

これは学識者からの講演と、実際に施工した事例等を話題提供していただき、それを検討していく中から課題の抽出をしていくと共にその解決策についても、研究会の中で議論を積重ねて東海地区の多自然型川づくりに貢献できればと願っております。

多自然型川づくり

多自然型川づくりの主要なテーマは、水と陸との接点にあたる低水護岸をどのように造成するかにかかっております。大河川の水衡部では、コンクリート使用もやむを得ないところがありますがそれでも今までと同じコンクリート張でなく一工夫が必要と考えていますし、今後は水制をいかに工夫して使い、静水域であるワンド形態を河川内に創っていくことによって昆虫や、小さな魚の生息場を確保し多様性のある川づくりを進めていく必要があります。

また、平野部で河床勾配の緩やかな中小河川では、極力

コンクリート張を使わず伝統的工法や新素材を取り入れて、いかにして植生に配慮した川づくりをするかが重要でありますがそれと共に地元の意見を聞いて方向付けをしていくことが大切であり、昨年は主として中小河川において研究を進めてきました。

地元の意見を聞く中で特徴的なことは、濃尾平野は洪水災害に苦しみられてきたことから多自然型川づくりに理解を示しながらも安全第一の考えが強く、多自然型川づくりが安全性においてもコンクリート張と遜色がないことを理解していただけるような説明が重要であることを痛感しております。

なお、安全性に対する意思表示は川に近い人ほど、また高齢者ほど強い傾向が見られます。

魚にやさしい川づくり

魚類の生息環境を検討する場合、魚が川を自由に行き交うことができるか、またエサ場、休息場、逃場、産卵場があるかが重要な要素となってきます。魚が自由に川を行き交うには、横断工作物を遡上又は降下ができるか、遊泳魚・底生魚共に遡上できるかが大切であり、その両方から検討し横断工作物の形状並びに魚道の位置及び形状等の検討を進める必要があります。

エサ場、休息場、産卵場等を確保していくためには瀬と洄りが重要な要素となります。それには瀬、洄りの調査を行い今ある洄りをいかにして存続させるか、洄りをいかにして創出していかかがこれからの大きな課題と言えます。

昨年 S 川において、既設の落差工に魚道を提案させていただきましたが、基本的には現在市販されている魚道ブロックを組合せて、遡上魚及び落差工直下に迷入した魚の両方を遡上させるべく段階式魚道と扇形魚道の複合形としました。遡上効果につきましては今年の調査を待たなければなりませんが、効果の出ることを期待しています。

これから 2 年目を迎えますが地域の皆様の御期待に沿えるべく、地に足をつけ一步一步成果を蓄積すべく努力を重ねてまいりますので引き続き御支援と御指導の程お願いいたします。

リバーフロント整備センター 岐阜分室
〒500 岐阜市司町 1 番地岐阜総合庁舎 1 階

TEL 058 (264) 8151 FAX 6757

次 長	梅谷内 信 夫
主任研究員	鈴 木 金 治
主 事	鷲 見 昌 子